

あとがき ～教師の出处進退～

■退き際の美学■

教師の退き際と言うと、決まって蔵本穂積さんを想う。蔵本さんは大阪の美術教師で、私は生活綴り方の師として出会った。仲間内の学習会に講師として来ていただいたのが30年ほど前で、その頃すでに退職されていた。その蔵本さんが定年前退職された時の弁が、なんとも粋だ。

同和教育の芸術認識という分野の大家であった蔵本さんは、美術教育において相対評価で輪切りにして成績を付けることに抵抗があり、そうせざるを得ない現実**に強い心の痛みを感じておられた**。多分、研究会事務局の仕事などで現場を離れられた時期があって、再び教室に戻られた後のことだったと思う。成績の時期を迎え、やはり輪切り評価をするのだが、以前ほどの心の痛みを感じなくなったそう**だ**。その自分の心のあり処に気付いた時、教室を去る決心をしたのだという。――これは私が30歳の頃に聞いた話なのだが、憧憬と尊敬の眼差しで傾聴したことを思い出す。

蔵本さんの真似などできるはずもないし、しようとも思わない。それでも、50を過ぎたころから、教室を去る日の自分の姿を空想するようになった。そして、その頃から、いい仕事をして終わろうと自分に誓っている。「いい仕事」とは抽象的すぎるが、自分なりの「ものさし」はある。教育って少なくとも教師と子どもたちとの共同作品だから、1年を終える時の学級を見れば大凡の評価はできる。

「終活」と言う自分の人生の終わり方の設計図をつくることと、教室を去る日の自分の姿を空想することは、どうやら共通するものらしい。ここ数年は、いつ終わりになってもいいという1年勝負を繰り返してきた。そのまま定年までという選択肢もあったのだが、少しばかり余力がある状態で終わりたいというのが正直なところだ。50代後半の1年1年は、体力・気力・胆力の何れをとってもその減退ぶりは目を覆いたくなるほどだ。

「退き際の美学」はロマンであって、「もうそろそろいいのどちがう」というもう一人の内なる自分の囁きに背中を押されてこの日を迎えたというのが、まあ現実的な「退き際の哲学」だ。

■一隅を照らす■

「一隅を照らす、これ則ち国宝なり」という言葉は、天台宗の開祖である伝

教大師・最澄の言葉で、「それぞれの立場で精一杯努力する人はみんな、何者にも代えがたい大事な国の宝だ」という意味だ。我が家は弘法大師・空海の真言宗なので最澄とのお付き合いはないが、この一語は当を得て妙なり。2012年の売れた本ベスト2になった渡辺和子著『置かれた場所で咲きなさい』というのも、実は読んだこともないのだが、同趣旨の響きがある。

考えてみれば、この職に就いて37年、自分でポジションを選び取って仕事をしたということなど1度もない。たまたま初任校が同和校であったことで同和教育に強く惹かれるのだが、同和教育推進教員というポジションが巡ってきたのは16年目、2つ目の学校でのことだった。その後、同和教育研究会の事務局へ出たのも偶然の成り行きを是としたまでのことで、自ら望んだわけではない。さらに、ここ10年ほどは人権教育担当が回ってくることはなく、専ら生徒指導の専門家みたいになっている。これも校内人事の事情によるものだ。高学年担任がすこぶる多いことも校内事情の成り行きでしかない。――つまり、雇われの身というのは基本的にそういうものなのだ。(もちろん例外はあって、自分はこの学年でなければダメだとかねる人もいるのだが…。話のついでに脱線すると、校内人事の希望というのは誰にもある。そんな希望を受けて、40くらいまでは校長との折衝をよくやった。人間関係の機微は校長よりも現場感覚の方が確かなことが多いし、大抵の大筋は聞き入れてもらえた。“陰の教頭”などと本物の教頭に言われることもあったが、それでもやっていたのは自分の人事を口にするには決してなかったからだ。その結果、みんながしんどいと感じている学年の大変そうな学級を担当することが多かった。それが高学年教師である所以だ。)

つまり、私たち凡才にとっての仕事というのは、置かれた状況の中で精一杯生きるということだ。キャリアは、歩んだ足跡として後から付いてくる。

19年目というのは同和教育推進教員をしていた年で、文字通り職場を背負っているような位置にいた。そこへ事務局転出の話が来て、受諾はしたものの後ろ髪を引かれる思いでいた。「草尾さんがいなくなったらやっていけない」などと言われて、半ばそんな気にもなった。前のめりになっている時は視野狭窄に陥りがちで、自分を客体化して見るのが困難だ。入れ替わりに着任した校長は、「職員会議にも出なくていい。全市的な仕事をするのだから、それに専念せよ。」と言われた。頭から冷水を浴びせられたような衝撃だった。

年度の前半は職場から相談を受けることもあったが、それも徐々に疎らになっていった。草尾がいなくなって学校が潰れることなど、当然のことながら全くなかった。

その時に悟ったことがある。「職場にとってなくてはならない人」という言い

方は間違っている。「今年の職場にとって」と言うのが正しい表現だ。ただし、今年の職場にとってなくてはならない人は特定の誰かだけではなくて、その年に配置された人すべてだ。経験年数や担う役割で軽重があるように見えているが、それぞれがそれぞれの立場で職場を支えている。そして、なくてはならないと思われている人が抜ければ、誰かが代わりを担うようになっている。働くというのは、基本的には欠けているピースを精一杯埋める作業でもある。案ずるに及ばずだ。事実、公立学校の倒産など聞いたことがない。

やはり、それ以上でもなくそれ以下でもなく、置かれた場所で精一杯生きるということだ。

■リーダー論■

言いたいことを言う割には管理職に重用され、恵まれた教員人生を送ってきたと思う。そして、40歳で文部省の教育視察でヨーロッパへ派遣されたころは、同年代の中で最も管理職コースに近い位置にいたみたいだ。しかし、私自身は、主義というほど頑ななものはないがついに管理職試験を受けることはなかった。そんな私がリーダー論を口にするのはどうかと思うが、大量採用の世代と違い基本的に管理職になるしかない少数精鋭世代の皆さんに伝えておきたいことがある。

これも40歳の頃、中学校区で学力向上の地域指定を受けていた。私は研究チームとして中学校の校長先生ともご一緒させていただくことが多かった。その時の中学校長と勤務校の小学校長は対照的な方で、それでいてどちらも尊敬できる師であった。リーダーには2通りあるという自説を、このお二人を紹介することで展開したいと思う。

中学校のA校長は、「頼れるリーダー」である。

先に書いた地域指定というのは2年間の県教委指定で、最後に研究冊子にまとめることになっていた。初年度の第1回会合で、A校長は研究冊子の「目次」を示された。これには大いにビックリした。――この1例が物語るように遙か先が見通せる賢明な方で、この人に付いていけば間違いはないという大先生だった。理論家であり且つ行動力もあるのだから、鬼に金棒。職場の中の小事は分からないが、これ以上ないというリーダーとして私の目には映っていた。「黙ってオレに付いてこい」と言われなくても、黙って付いていきたいと思う王道的リーダーである。

Aタイプのリーダー的資質としては、優れた教育観と論理力、カリスマ性を伴

った統率力や行動力といったことが挙げられる。

一方、小学校のB校長は、「頼りにしてくれるリーダー」である。

我がB校長は、基本方針を示し、それを具現化できると思える職員に全てを任せ、ぶれることなく支え続けてくれるという人だった。この時すべてを任せてもらった職員が私で、この人のおかげで私は存分に仕事ができる。ある時、肉を食べ過ぎると髪の毛が薄くなるという新聞記事を見つけて、校長の机に忍ばせておいた。翌日それを見つけた校長は「誰や、こんなもの入れたのは。」と言って、目はこっちを見ている。「こら、もう連れて行ったらへんど。」と言いながら、焼き肉に連れて行ってくれる。ビールの飲み比べをする時は、横並びの関係だ。ちょっと王道とは言えないが、十分にアリな「別解」的リーダーだと思う。

Bタイプのリーダー的資質としては、ぶれない教育観、懐深く任せきる度量、偉ぶらない人間性といったことが挙げられる。

私自身は、B校長タイプの管理職が肌に合っている。後年出会った新任校長さんが、「校長としての力量が…」と気弱な言葉を漏らされたことがあった。止めとけばいいのに、私は件のリーダー論を口走った。そして、まさにB校長タイプのリーダーだと感じていると加えた。後の酒席で、お前の言葉で自信を持てたと何ともけったいな礼を言われてしまった。これは余談。それにしても、Aでもない、Bでもない、何にもない校長の多いことよ…と嘆くのはよそう。私は管理職試験に挑戦すらしなかったのだから。

■子どものとなり■

座右の銘は、「子どものとなり」。

灰谷健次郎の著書に『子どもの隣り』というのがある。私は灰谷さんの本が好きで、教師になったばかりの日に『兎の眼』を読み、作中の小谷先生のような教師になりたいと憧れたものだ。ただし、座右の銘は灰谷さんとは無関係。

教師になって6年目、その年は6年生を担当していた。

最も気に掛けていた子どもが、あるとき、「悪ぶって見せていても心の中は寂しいということを知っておいてほしい」と書いてきた。子どもの良き理解者であると自任していた私は、勿論そんなことは百も承知で付き合っていたつもりだったがだけにショックだった。そして、自らの思いとは裏腹に、子どもにとっては目の前に立ち塞ぐ巨大な灰色のカベでしかない自らの存在を再認識させられた。子

どもと教師の思いのズレの責は、100%教師が負うべきものだ。「スマン」と心の中で手を合わせた日のことを、私は生涯忘れないだろう。

子どもに寄り添うと言うけれど、所詮教師は教師。教師が子どもの友だちや仲間になれるはずはない。かと言って、子どもの前に立ちはだかる物知り顔の大人にはなりたくない。子どもの尻をたたく調教師も、真っ平御免だ。そうして辿り着いた立ち位置が、「子どものとなり」だ。人生のチョット先輩として求められればアドバイスもするし、手助けもする。そっと見守るだけでもいい。そんな立ち位置が、子どものとなりというわけだ。

46歳の時、大きな転機があった。学級や授業から離れて9年、後半の5年を専従事務局長として活動してきた私には、その後の「選択肢」は極く限られていた。度重なる管理職試験の誘いを断ってきた私の耳元で囁かれたのは、市教委・県教委への任用だった。これは性に合わない。結局、私が選んだのは市外に転出して1教員として出直すことだった。結果的には、この選択によるその後の13年間は、私の教員人生をかくも実りあるものにしてくれたのだが…。

貫いたのは、「子どものとなり」という立ち位置ただ一念。そこに立ち切れたかと訊かれると、心許ない。要は子どもたちがどう感じていたかだ。心情としては、常にめざしてきたつもりだ。

「スマン」と手を合わせた日から31年。彼は今の私に会ったらなんて言うだろう。そんなことを自問しつつ、とうとう退場の日を迎えることに相成った次第である。

■おわりに■

「教育の森」というのは、元々は私のホームページの隠しリンクページの名前だ。ホームページは「風のささやき」と言って、趣味の写真を中心に幾つかのフォトエッセイもアップしている。「風のささやき」の向こうにあるのが「教育の森」というわけだ。

ホームページのアドレスは一部の友人知人にしか知らせてないし、検索でもヒットしない。その隠しリンクなど、知っていたのは3人ほどだ。そこに置いていた論文やレポートが、本「教育の森」のベースになっている。

内容的には「森」というより「疎林」だが、ネーミングの由来はホームページの言葉合わせなので、お遊びということで勘弁願いたい。

2013年4月の配信開始から2年が過ぎた。変革の期待を裏切った民主党政権の後に誕生した自民党安倍政権は、おどろおどろしい変革の大ナタを恐ろしいほどのスピードで振り下ろし続けている。その煽りで、配信計画時の内容の一部変更を迫られることもあった。変革が教育改革なのか改悪なのかは即断できないが、私には明るい展望は見えてこない。

事務局の仕事に縁があって、平和教育サークル、解放教育サークル、市民文化活動サークル、平和運動団体、護憲運動団体、労働運動団体の事務局を都合20年ほどやっただろうか。それぞれの会で発行した「会報」は、合わせりゃ結構な量になる。所属する教職員組合でも3年間、機関誌を担当した。私の「眼力」^{めちから}はそこで鍛錬されたように思う。それらの記録は、「教育の森」には一切登場しない。

「教育の中立性」という。しかし、本当の意味での「中立」などない。自民党政権がそれを声高に叫ぶ時、「中立」とは自民党の教育政策に限りなく近い教育を指す。それは、私から見ればえらく「右」に寄りすぎた教育だ。逆も然り。私の見方は、自民党の教育政策からすれば「左」寄りの思想ということになる。そもそも近年は座標軸そのものが右に寄っている(これを社会の右傾化と言う)。つまり、中立云々は相対的な関係性の問題なのだ。教育政策や教育の動向は、そのことを踏まえて見なければ真の姿が見えてこない。がむしゃらに熱心なだけではダメだ。

「教育の森」の姉妹編で「教育の原野」なんてどうだろう。

2年間に配信した「教育の森」は、総計760余ページになった。印刷しなくていい気楽さから、ダラダラと間延びした文章になった反省もある。それでも、伝えたいことの総てを網羅できたわけではない。

「教育の森」は、14人の方にメール配信させていただいた。実は、人づてに紹介いただいた何人かの方は今もお顔が分からない。まさに一方通行のネットつながりだ。それでも、もしかするとメールを開いて読んでいただいているかも知れないという蜘蛛の糸ほどのつながりが、2年間の励みだった。

受信いただいたみなさんに「ありがとうございました」の言葉を添えて、最後の配信としたい。

2015年3月
草尾佳秀